

沙石集

無住一圓著。弘安二（1279年）起筆、同六（1283年）成立か。

「沙石集」卷第三の「六 小児の忠言の事」の一節。

岩波文庫「沙石集」上巻筑土鈴寛校訂より。なお、「本朝孝子伝」参照。

信州に、中昔、或人京より人を思ひて具して下りてける。京に物申す人あまたありけるかたより、文をくだしおこせけるを、あまた有りけるをかくし置きたるを、かかる事なんありと、告知らする者有りければ、夫是をたづね出して、我は物もえ書かず、讀まざりけるまゝに、子息の兒、戸隱とがくしの山寺に有りけるをよびて、母の前にてよませけり。母色をうしなひて肝心きんしんも身にそはぬ躰也こゝて。此兒心あるものにて、ただよのつねの文のやうにやはらげて、あまたの文を讀みてければ、人の和讒なりけりと思ひてやみぬ。この繼母餘りにうれしく思ひて、いたいけしたる翫あそび物取具して、文をやりける。

しなのなるきそぢにかくるまる木ばしふみみしときはあ

やふかりしを

此兒返事に

しなのなるそのはらにしもやどらねどみなははきぎとお
もふばかりぞ

かの関子騫に似たり。梵網の文にもあひて哀れなり。一切の
男子は皆我父、一切の女人は皆我母なりと説けるにたがはぬ
心なるべし。哀れなりける心なるべし。父の家をもつぎて侍
りけるとなん。

註 岩波文庫本は国立国会図書館デジタルコレクション

ンに画像あり。72、73コマ目。DOI 10.11501/1040496